

拝啓 今年も早や9月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。今年、8月は猛暑の日が続き、9月になると涼しい日も多く、不順な天候の夏でした。近所の公園では、さるすべりが大体終わりの時期となり、10月の初めには咲くきんもくせいがつぼみを膨らませています。

今回は佐生健光さんの『キリスト教と称名』の第7回です。「デビッドソンの言葉 (2)」という項目には次のように書かれています。

「すなわち平凡な生涯とは、自分の目の前におかれた誰でもできる仕事をし通した生涯であり、それを全力をあげて成し遂げた時、神の悦び給ふ潔き活ける供え物となり、その生涯が、人間にとって最も偉大な生涯となるということである。…神の意思に沿ったこととは何か。それは目の前に置かれた、今、なすべきことをなすということである。小西先生は、それを明確にお教えくださったのである。

私の目の前に置かれたことは、いかに平凡なことであろうとも、今、私のなすべきこととして神が置かれたことである。これを私が全力投球することは、神のみ心に沿ったことになる。それはルカ伝10章の「よきサマリア人」のたとえにある隣人に対する愛に相当する。…」

この言葉は、小西先生から何度も聞いた言葉です。最近強く感じますのは、目の前の義務もたくさんあって、いくつもの義務が重なることを経験します。その時小西先生から聞いた、自分のしたいことではなく、しなければならないことをやれ、という言葉を実行してみると、おのずと順番がついて、仕事ははかどることを何度も経験しました。

『小西芳之助の生涯』は、エンカウンターの読者の皆様、元の教会員をはじめ多くの方に贈呈し、感想の手紙やメールをたくさんいただき、毎日それを読むのが楽しみです。

薬学史の研究者の森本和滋さんからは、次のような一節があるメールをいただきました。「第3部の「同志会日誌語録」は、小西先生の若者への適切なアドバイス興味深く思いました。とてもよく編集されたと思いましたが、実はあの「語録」は、村上瀏治さんが、同志会の膨大なノートの中から丁寧に小西先生と石館先生の発言記録を抜き出して清書された文集から、選んだ言葉です。多くの人に訴える大切な言葉だと思っていて、私としては、一番読んで頂きたい箇所です。村上さんにも、本をお送りしましたところ、今年亡くなられたということで、本を見て頂けなくて大変残念に思いました。

森本さんの感想に「第4部、恵心流キリスト教、分かりやすい内容で、特に第2章が素晴らしいです。キリスト教に偏見をもって距離を置いている日本人にも、本書を読むことによって、キリスト教への敷居が低くなることを期待します。」と書いてくださいました。

大勢の方から、感想を頂いており、苦勞が報われるとともに、元気を頂きました。

台風の過ぎた後は、涼しい秋がくるでしょう。皆様も、マスク、手洗い、うがいなどを励行されまして、お元気で毎日お過ごしくださいますようにお祈りいたします。

9月24日

山口周三

エンカウンターの読者各位